

〔基調講演〕

大震災復興と沖縄の国際文化

— Recovery from Disasters and International Cultures
in Okinawa

瀬名波榮喜

Eiki SENAHA

●名桜大学学長
(英文学)

シェークスピアの傑作『ハムレット』の中で主人公ハムレットは、学友ホレーショーに対し、“There are more and more things in heaven and earth, Horatio, than are dreamt of in your philosophy”と言っています。去る3月11日に起きた東日本大地震、それに伴う津波はまさにハムレットの言葉がいっそう真実味を帯びてきます。一体全体誰がこの大惨事を予想しえたでありますでしょうか。人智をもってしては、到底計り知れない災害が起き、幾多の生命が失われ、行方不明者も万を数えるといわれています。家や財産を失い、今なお避難生活を余儀なくされている方々も多いと報道されています。心より哀悼の意を表しますとともに、同情の念まことに禁じえないものがあります。

西洋文明の特徴はといえば、人類は古代ギリシアから現代に至るまで過去にすばらしい世界、すなわち楽園または黄金時代を享受していたと考えています。その楽園思想は西洋文学の大きなテーマとなっています。しかし人類はその楽園を喪失してしまいます。ギリシア神話に登場するアトランテイスは、海底に沈む前は、楽園であったといわれており、旧約聖書に描かれるノアの大洪水もそのことを物語っています。ところが人類は失われた楽園を回復してしまいます。それが復楽園であります。このように人類は、その昔楽園に住んでいたが、それを失い、そしてそれを復元するという歴史を歩んできたのです。

東日本も沖縄もそのような歴史を歩んだのではないのでしょうか。今回楽園を喪失してしまいました東日本の惨状を見るにつけ、沖縄県民にとってはどうしてもわれわれから楽園を奪ってしまった沖縄戦と重なってしまいます。それでは沖縄はどのような楽園を享受していたのでしょうか。

かつて沖縄は琉球王国であり、国際貿易によって繁栄をもたらしました。250年もの長い期間にわたって日本が鎖国政策をとっていた江戸時代においても変わることはありませんでした。特に1609年薩摩の侵攻以前は、琉球国のいわゆる黄金時代を謳歌していました。黄金時代とは人類の歴史の中で銀時代や銅時代や鉄時代とは異なりもっとも幸せに満ちた時代ということであり、時間的には黄金時代であり、空間的には楽園であったのです。

その昔琉球王国は国際文化の十字路となったのです。それは沖縄の歴史が異文化接触または国際交流の歴史であったことを物語っています。1458年に鑄造され首里城正殿にかけられていた「万国津梁の鐘」に刻銘された名文を読めば明らかであります。その漢文の序文は、「琉球国は南海の勝地にして三韓の秀を鐘め、大明を以って輔車となし、日域を以って唇齒となす。此の二の中間にありて湧出する所の宝来島なり。舟楫を以って万国の津梁となし、異産至宝は十方利に充滿す」に始まり、琉球がいかに繁栄していたかを歌っています。朝鮮からは優れた文化を受け入れ、中国との関係は上顎と下顎の関係、すなわち相互依存の関係にあると述べています。また、日本との関係は、齒と唇の関係にあつてその絆は断絶できるものではありません。このような関係から、琉球の隅々まで外国の文物が充滿していると歌っています。船を架け橋として、北は朝鮮から南は遠く東南アジアまで行き、国際貿易を行っていました。それはヨーロッパの大航海時代に先立つ琉球王国の国際的な交易でありました。このように15～16世紀は琉球国に輝かしい繁栄をもたらした黄金時代であり、蓬萊島いわゆる楽園でありました。

1945年3月23日に始まるアメリカの上陸作戦まで保存継承されてきた琉球固有の文化は、これらの国々の文化を受容し、その影響を受けて創造されてきたものであります。世界遺産首里城の正殿を見るがよい。それが中国建築の影響があることは一目瞭然であり、あたかもそのミニチュアではないかと思われるほどです。同じく世界遺産に指定された琉球古典劇組踊は、日本芸能のひとつ能の影響を見落とすことは出来ません。伝統工芸のひとつ紅型は、京都の友禅または東南アジアの染色技法の影響をうけており、泡盛はその起源がタイ国にあるといわれています。首里城正殿の屋根と玄関や守礼門の屋根と柱を見ていると、琉球文化は、中国文化と日本文化の折衷だといえないでしょうか。正殿の玄関は日本のお寺のそれであり、守禮門の柱は神社のそれだからであります。

アメリカの作家スナイダーの小説を劇にした『八月十五夜の茶屋』に登場する通訳サキニーは、「琉球の人々は外国に行く必要はない、何故なら欧米の人々が此の島にやってくるその国の文化を持ち込んでくるからだ。」とっています。彼の発言は半ば正しいといわざるを得ません。19世紀になると、西欧列強から次々軍艦や商船が琉球にやってきます。

1815年ナポレオンがワータールーの戦いに敗れた翌年、すなわち1816年にはイギリス海軍のライラ号の艦長バジル・ホール一行が那覇に上陸し40日間滞在することになります。彼らは、琉球の人々とは実に友好的関係を構築し、琉球人を信頼するとともに礼賛しています。彼らは琉球人を艦上に招き、歓待しました。そこで琉球人は、初めて西洋文化に接触するようになります。イギリス人がもっともびっくりしたのは、途中立ち寄った東南アジアの国々で起きたことが、琉球ではまったく起きなかったということであり、艦上で何一つ盗まれることはなかったということでもあります。琉球人は嘘をつくことがなく、いかに正直で信頼できる人々であるかを賞賛しています。18世紀から19世紀にかけて文明は人間を墮落させるものであるという文明批評があり、その対極にある純心無垢な自然人を「高貴なる野蛮人」(noble savage)と呼んで賞賛していましたが、彼らは琉球人をそのような目で見えていたのでしょうか。もしそのように見ていたのであれば、琉球はまさしく彼らのいう楽園であつたに違いありません。

バジル・ホールは、帰国の途次、ナポレオンが幽閉されているセントヘレナに立ち寄り、ナポレオンに面会することができました。彼は武器のない国があることを紹介すると、一体その国はどこにあるのか、と驚くばかり！今の時代に武器を持たない国がどこにあるかと問いました。バジル・ホールは、喜びに喜びました。何でも知っているというナポレオンの知らないことを知っていたからです。しかし、地図を広げて琉球国を指し示すと、「そこだと思った」と言い、バジル・ホールをがっかりさせてしまったというエピソードがあります。戦争に明け暮れてきたナポレオンが、武器のない平和な琉球国があることを知らされびっくりしたのも無理はないでしょう。琉球は平和な楽園そのものだったのです。

イギリスの海軍伝道会は、琉球滞在中物質的に大変世話になったことに対し、精神的なもので恩返しをすることにしました。それが1846年の宣教師パー

ナード・J.ベッテルハイムの派遣であります。彼は新約聖書の琉球語訳を始めただけではなく琉球に天然痘接種法を導入した医師でもあります。しかし、幕府の鎖国政策の下、官憲の厳しい監視下に置かれ、意のままに布教活動はできませんでした。したがって、彼の活動の舞台は、首里の農産物市場や那覇の船着場で、そこに集まる田舎の農民や船乗りが布教の対象となりました。「あなたたちは、キリスト教を信じれば、首里那覇の人々と平等になり、差別され馬鹿にされることはない」、と説教したとのこと。結局彼の布教活動の功績といえば、聖書の琉球語訳といえようが、彼本来の使命であるキリスト教という精神文化による「恩返し」は成功することなく、1854年ペルリーとともに琉球を去り、アメリカへ去ってしまいました。

したがって、ベッテルハイムの琉球観または琉球人間観というのはバジル・ホールとは対照的に、必ずしも好意的なものではありませんでした。それを憂えた沖縄の知識人たちは、日支事変の始まる2ヶ月程前の1937年4月末日、彼の孫娘ベス・ベッテルハイム・プラット夫人を沖縄に招き、祖父の心の故郷沖縄の首里那覇へ案内しました。「我々の祖先は祖父に対し、すまないことをした」というので、そのお詫びをするためでありました。その中心的役割を演じたのは、ベッテルハイムからじかに種痘法を学んだ仲地紀仁侍医の4代目に当たる仲地紀晃医師、那覇市長金城紀光、助役當間重剛、琉球大学初代学長志喜屋孝信、同第二代学長胡屋朝賞氏らでありました。沖縄県教育主事島袋源一郎が彼女を横浜で出迎えたといえます。「イチャリバチョーデー」(一度会えばみな兄弟)という沖縄の心を示す美談だといえましょう。また国際交流の典型だといえましょう。

ペルリー提督が日本に鎖国から開国を迫るために立ち寄ったのは、1853年のことであるが、沖縄の平和な楽園を破壊したのは1945年の空襲に始まる沖縄戦前後のことです。緊迫した戦時下にあって米軍の上陸作戦に備え、多くの文化遺産を自らの手で破壊したのです。現在復元され世界遺産のひとつになっている読谷村にある座喜味城は、1422年護佐丸によって築城されたものであります。その文化的価値は、オランダの築城技術を採用されたという城壁の曲線美にあるといわれていましたが、われわれ学生は、その松の大木に覆われ古色蒼然とした城壁を容赦なく破壊し、高射砲陣地を構築しました。

しかし、さる3月11日に起きた東日本大震災を見ていると、沖縄戦を想起せざるを得ません。あの高い防波堤を乗り越えて、町や村の家々を次から次へと嘗め尽くし、一瞬にして楽園を失ってしまいました。それは1500隻のアメリカの艦船が、沖縄の海を埋め尽くし、上陸用舟艇が海岸を目指して襲いかかる場面が重なってしまいます。疎開船が撃沈され、波に飲まれていく児童生徒のすがた、火炎放射器の餌食となっていく住民、いずれを取ってみても大震災を想起せずにはおれません。

人類の歴史をたどりますと、自然観の変遷がよくわかります。自然は神聖であるとか、慈悲に満ちているとか、無関心であるとか、機械であるとか、生命体であるとか、いろいろな自然観が論じられてきました。しかし、今回の大震災をみていると、19世紀にライエルやダーウィンが提唱した地質学や進化論の影響を受けた自然観は、今回の自然の猛威をもっともうまく表現しているのではないかと思います。すなわち、自然は人間の血を吸い歯と爪を真っ赤に染め、人間を食い殺す存在であるということです。時の桂冠詩人テニソンは、いみじくも“Nature red in tooth and claw”と歌っています。

わが国で住民を巻き込んだ地上戦が展開されたのは、沖縄県だけであります。その中で生死を決定的ならしめたのは、英米文化の理解があつたかなかつたかにかかっています。離島を始め上陸地点では、集団自決の悲劇が起きていますが、異文化経験のある人がおれば、そのような惨劇は起こらなかったのです。事実、米国帰りの人がいた壕では集団自決は起きていません。また、ある中学生が銃殺されようとしたとき、What time? と聞いただけで命拾いした例もあります。ドイツでもそのようなことがありました。ドイツ人が英国人の捕虜となり、銃殺されようとしたとき、Thomas Grayの傑作“An Elegy Written in a Country Churchyard”の一節“The curfew tolls a knell of parting day”を暗誦したら、敵同士だった二人が友になったといいます。言語文化の重要性を認識しないではおれません。

大震災と沖縄戦における人命の損失は想像を絶するものがあります。3月20日現在大震災の死者行方不明者は2万921人に達しており、実に驚くべき数字となっています。一方、沖縄の最南端に建つ平和の礎には、24万1,132人の戦没者の名前が刻銘されています。そこにはもはや敵味方はありません。アメリカ人、イギリス人、韓国人の戦没者の名が刻銘されバジル・ホールが言っているように、沖縄人は死者を大事にする文化を持ち、死者に鞭打つこ

とはなく、幾世紀にもわたり外人墓地を造り、沖縄で死んだ外国人を暖かく葬っています。県民の四海同胞の精神を具現していると思います。

大震災によって東北は人命の損失だけではなく、家を流され土地財産を失い、そして貴重な公的私的文化財を失ってしまったと思いますが、沖縄も我々の祖先が幾世紀にもわたって築きあげてきた琉球独特の文化遺産をことごとく失ってしまいました。沖縄は国宝の数においては、京都・奈良に次ぐといわれていただけにその損失は惜しまれてなりません。幾世紀にもわたって石垣やガジュマルの木に囲まれた赤瓦の家々、それはまさしく平和な楽園そのものでした。その楽園を喪失し、文字通りゼロからの出発となりました。

失った楽園は取り戻さなければなりません。被災された東北の人々に対する同情や支援は、国の大小を問わずほとんど世界の多くの国々から寄せられています。私も東南アジア、ヨーロッパ、オセアニア、北米などから多数のメールや手紙をいただきました。そのほとんどが、“My thoughts and hearts are with you and all the people of Japan.”という内容でした。世界の人々否人類が一心同体になってしまった感を強くしました。形而上派詩人ジョン・ダンの有名な言葉を思い出さずにはおれません。「島は大陸の一部であると同様、一人の人間も人類の一部である。一人の人の死は全人類の死である。故に誰がためにあの吊いの鐘は鳴る、と訊くなかれ。それはあなたのためになっているのだ。」と説教しているが、世界の人々はそのような思いではないのでしょうか。我々人類はひとつの生命“One Life”を共有しているのだと感じざるを得ません。

では沖縄のゼロからの復興はどのように始まったのでしょうか。第一に、東北の場合がそうであったように、沖縄でも共同体意識の強いゲマインシャフトの精神が健在であったことは幸いというべきでしょう。いわゆる「結いマール」という相互扶助の精神が大きな支柱となっていました。家を建てるにも田植えをするにも村をあげて協力し、生活文化の再建から始まりました。木陰で授業を受けていた生徒たちも、やがてはいわゆる馬小屋教室を自ら建て、教育の復興が始まりました。第二に東北の場合国内外から「頑張れ！」と力強いモーラルサポートがあり、多くの国々から物的支援を受けているように、沖縄の場合、北米や南米の沖縄県人会から物心両面から支援の手が伸

べられてきました。たとえば、ハワイの県人会からは、種豚や山羊を送ってもらい、畜産業の復興がスタートすることになりました。その輸送は「豚の移送大作戦」と題して映画化され、実に感動的なものでありました。このような同胞の支援は我々を勇気づけ、復興への大きなエネルギーとなりました。

それでは、我々の生活文化はいかがでしたでしょうか。米軍から配給される食糧はいずれも珍しいものばかりでした。ソテツを食べてきた我々にとっては、ご馳走そのものでした。加州米をはじめ今では見ることのできない卵粉“Egg powder”やアイスクリーム粉“ice cream powder”やコーンビーフの缶詰類など、西洋の食文化と出会うことになります。衣文化はどうだったのでしょうか。男性も女性も米軍の軍服HBT（Herring Bone Tweed）を解いて、服や帽子をつくって着たものです。住文化については、米軍からの“two-by-four”の材木を使って、規格住宅を建てるようになりました。

戦前の沖縄では、暴風との関係もあってか、じめじめした山の麓か谷間に家を建てる傾向がありましたが、アメリカ文化から学んだことは、家を高台に建てるということでありました。アメリカでは、通常ビジネス街は「ダウタウン」、住宅街は「アップタウン」となっています。また、ヨーロッパでも市民は元来山の上に都市を築いたものです。ドイツ語の「ベルク」はそれを意味しており、それが変化して「ベリー」となりまたは「バラ」となったのです。ドイツの「ハイデルベルク」がそうです。イギリスの「カンタベリー」やスコットランドの「エジンバラ」がそれを物語っています。大震災からの復興についてはこれらの西洋文明から学ぶところがあるのではないのでしょうか。

しかし、皮肉にも戦災の中から生まれたのは、負の遺産ではありません。戦場や収容所であって、優れた和歌や琉歌や戦記文学が生まれたのも事実であります。人間は極限状態になると、詩人になってしまうのです。マーガレット・ミッチェルが南北戦争を背景とした小説『風とともに去りぬ』を書き、また、ヘミングウェイが第一次大戦を背景にした小説『武器よさらば』を書いたように、大城立裕は戦直後の沖縄の国際文化を背景にした『カクテルパーティー』を書き芥川賞を得ています。大震災からもきっと優れた文学作品が生まれてくると期待しています。

我々が沖縄戦により楽園を失って66年の歳月が流れてしまいました。その間、国宝級の建築物や国立劇場や県立芸術大学なども誕生し、琉球文化のルネサンスの到来を思わせるものがあります。G8が開催された「万国津梁館」も建てられました。しかし失われた文化財は二度と戻ってきません。復元されたものはレプリカに過ぎません。復興には長い年月を必要とします。東北の人々が、沖縄県の戦災復興から何か学ぶところがあれば望外の喜びであります。また、我々国際文化学会が東日本の災害復興のために何ができるか考える好機となれば幸いです。そして楽園を回復するだけでなく、人智を結集して「永続的な楽園」を構築しなければなりません。

ご静聴ありがとうございました。